



ものづくりマイスター派遣先

福井県インテリア事業協同組合

〒910-0005 福井県福井市大手 3-7-1
(福井県織協ビル6F)

概要

(H27.7 取材当時)

理事長 野尻 久幸

資本金 219万円

設立年 昭和49年6月(昭和49年8月 法人設立)

会員数 85名



若年職人の育成と技能の幅を広げるため 技能の向上に積極的に取り組んでいる

福井県インテリア事業協同組合では、若年職人の育成と技能の幅を広げるため、講習会を開催するなど、技能の向上に積極的に取り組んでいます。より高度で実地的な技能の習得のため、経験豊富な技能者による指導を行う場を設けたいと考え、「ものづくりマイスター制度」を活用しました。

今回は、福井県職業能力開発協会主催の技能者の大会である、「福井 技の祭典」の壁装部門へ出場する若手職人に対して、大会に向けた技能の基礎固めとレベルアップのための指導をお願いしました。



西原マイスターの指導の様子

カリキュラム

| | |
|------|-------------|
| 期間 | 平成26年9月～11月 |
| 実施場所 | 福井県青少年センター |
| 受講者数 | 7名 |

| | 指導日 | 指導内容 |
|---|-------|---|
| 1 | 9/27 | 受講者7名に対して、マイスターが補助者とともにクロス貼り施工の実演を行った。次回受講日までにクロスのコーディネートを決めて練習しておくことを受講生に対して要請した。 |
| 2 | 10/11 | 受講生の考案したコーディネートについて発表を行った。受講生(3名)が作品を制作し、作品の改善点等について参加者による討論を行った。 |
| 3 | 11/1 | 前回制作しなかった受講生による作品制作を行った。前回同様、作品の改善点等について討論を行った。受講者の質問事項(より綺麗に正確に貼るためには?カッターの入れ方は?糊の塗り方は?切り口の処理方法は?等)について説明を行った。 |

教え子が「上手になりたい」と 自ら思うきっかけ作りをする

● ● ● 教わったことを受け継ぎ 向上させて、次の世代に伝えたい

私が修業時代についていた親方は、知識も技能も秀でた方でしたが、それに加えて、ことあるごとに「職人のいろは」を教えてくださいました。その影響もあり、私も親方から受け継いだ技能を自分なりに向上させて、次の世代に伝えていきたいという気持ちを強く持っていたので、ものづくりマイスターになりました。

● ● ● 仕事だけでは習得しづらい技能を教え 「上手になりたい」という気持ちを高める

指導は若手職人7名に対して、3回に分けて行いました。3回という短い時間の中で講習の効果を挙げるために、「受講者の意識を高める」ことに注力しました。意識が高まれば、どんな難しいことでも、たいていは習得できますし、乗り越えられます。

受講者は、経験の違いはありますが、全員が現職の職人であり、業務の合間を縫って競技大会に出場し、好成績を取めることを目指して今回の講習に来ているので、向上心は皆が持ち合わせています。そのような受講者の「意識を高める」ということは、「受講者が仕事上では、なかなか経験・習得できない技能を見せて、教え、仕事の幅の広がりを実感させる」ことだと考えました。そのために、受講者それぞれのレベルを見て、どのような部分の経験が少ないかを把握し、教える内容を決めました。

● ● ● 「手法の説明」ではなく 「手法の成り立ちや理由」を深く考える

近年の職人の技能は、「工期を最優先とした、いかに早く綺麗に仕上げるか」という部分に偏りがちです。

そして、日々の仕事に追われてしまうことが多いので「早く綺麗に仕上げる技能」に関しても「その手法を知っている」のみで、「なぜそういう手法を採るのか、他の手法と比べて長所・短所は何か」等の本質的な部分についての知識が浅いままになっている場合が多いです。講習会では、「手法の説明」で終わらせずに「なぜそうなるのか、なぜそれをしなければいけないのか」を一つひとつ教えました。一人ひとりへの教え方は違いますが、それが伝われば嬉しいです。

● ● ● 表装の仕事の幅広さや 意義を体感し、広めていきたい

講習会は「福井 技の祭典」の競技自由課題を使用しました。目指す目標は、規定時間内に受講者自身がコーディネートした壁装作業を行う事で受講者のコーディネートセンスを磨き、かつ作業の正確で丁寧な仕上げです。壁装で使用する素材には和紙、布や金紙等もあります。これらを貼る作業は高度な技能が必要で、建造物の修繕や改修には不可欠な技能です。

表装の仕事は、近代的な建物の新築・リフォームから、歴史的な建造物の価値を維持し残していくことも求められる、幅が広く、意義のある仕事です。自分の努力次第で、いくらでも仕事の幅や価値を高めることのできる、やりがいのある仕事だということを広め、この業界に興味を持ち、入ってくる若者を増やしていきたいです。



ものづくりマイスター
西原 相春 (にしはら そうはる)

昭和27年7月3日生まれ
平成7年度 1級技能士 表装(壁装作業)取得
平成26年度 厚生労働省ものづくりマイスター(表装)認定

職人として大切な「姿勢」が 受講者の間に浸透していった

「福井 技の祭典」に出場する若手職人が 高度な指導を受けられる場を設けたい

福井県民に技能を公開し、技能尊重気運の醸成を図り、新たに職人を目指す若者を増加させることを目的とした「福井 技の祭典」の中で、技能を見せる「技能・製作実演大会」という大会があります。その大会の「壁装部門」に、当組合の若手職人が出場することになり、より高度で実践的な技能の習得のために、経験豊富な技能者による指導を受ける場を設けたいと考え、「ものづくりマイスター制度」を活用しました。

3回のカリキュラムの中で 高い学習効果を出す

ものづくりマイスターは、多忙なスケジュールの合間を見つけて講習会の時間を確保してくださいました。

その貴重な3回の講習時間を有効に使うため、内容と進め方については、ものづくりマイスターと念入りに吟味しました。そして、「3回の指導を通じて、受講者の意識を高めることで、受講者の自学自習の質そのものを向上させる」という方向性を定めました。

若手職人が、自らモチベーションを高め 切磋琢磨していく環境が作れた

受講者は、同じ大会に出場する選手であるため、互いにライバル関係でもあります。それでも、講習会を通じて顔を合わせ、ものづくりマイスターの指導を受けながら、分からない部分を教え合い、その上で自分なりに技能を向上させて好成績を目指していく環境が生まれました。互いを意識し、競争しながらも、認め合って切磋琢磨していく姿は、職人として成長する根幹とも言える姿勢ですので、それが受講者に浸透していくのを見て、嬉しく思いました。



野尻 久幸 理事長

表装職人の仕事の魅力をアピールし 興味を持つ若者を増やしたい

表装職人の仕事は、建物の内装といった人々が日常的に接するものを作ることから、歴史的建造物の修復改修まで多岐にわたります。いずれも、人々の生活を豊かにすることができる、存在価値の高い誇れる仕事です。そのことを、多くの若者に積極的にアピールし、この業界に興味を持ってほしいと思います。そのためには、この業界に入る若手が、高いモチベーションを保ち、安心して技能の向上に励むことができるような環境作りが不可欠です。「ものづくりマイスター制度」を活用したことで「実践と理論」の双方を組み合わせた若手育成方法のノウハウや効果を知ることができました。今後も、「ものづくりマイスター制度」の活用を積極的に行っていきたいと考えています。



練習風景

受講者の声

「技能の丸暗記」でなく その技能の成り立ちや理由を考える

● ● ● 仕事の幅と視野を広げる 貴重なきっかけとなった

私は、表装職人であった父の影響でこの仕事に就き、父の下で修業をした後に、独立しました。現在は、日々の仕事の合間を縫って、技能の幅と視野を広げるため、技能検定の受検や、大会への参加にも積極的に取り組んでいます。そして今回、「福井 技の祭典」への出場に当たって、西原マスターの指導を受ける場がありましたので、喜んで参加しました。7人の受講生と練習して一番感じたことは、受講生一人ひとりの発想(着眼点)に違いがあったことです。またコーディネートの方法が勉強になりました。

● ● ● 替えのきかない、難しい素材の仕上げを 任されるような職人になりたい

私は、「歴史的建造物や、替えのきかない、こだわりのある素材の施工」も任せてもらえるような職人になりたいです。そのためには「和紙や布といった、普段の現場では取り扱う機会の少ない素材の貼り方」や「現場



練習風景

の状況に応じて柔軟に対応する力」を身につけなければなりません。そのために、ものづくりマイ

スターに教わる事になるのですが、教われる時間は技能検定の1日の練習会と「ものづくりマスター制度」を活用した講習会だけなので貴重な時間です。



西村 一哉さん

● ● ● 「なぜそうするか」を 徹底して考える

西原マスターの指導を受けて、特に良かったと思うことは「なぜそうするのか」を常に考える姿勢が身についたことです。日々の業務では、技術がそこそこでも工期が間に合ってくれば良いという現場がある一方、仕上げを大事にして欲しいと要求する現場もあるので「技術力を売り」にした仕事をしていきたいです。受講生は、毎日何気なく行っていることを課題に出されていたとしても、「なぜそれをやるのか?」ということを実際には分かっていたりします。西原マスターは「なぜそうするのか」をしっかりと理解して受講生に分かりやすく説明指導してくれました。現場で作業をする際も、たとえ仕上がり方は同じであったとしても、その作業工程の基本を理解して作業するのと分からないで作業するのでは、状況が変化した時の対応が違ってきます。基本を理解していればその知識を活かして対応できる。こういうことを気づかせてくれた西原マスターはすごいと思いました。

地域技能振興コーナー担当者より

学校へのものづくりマスターの派遣実績は増えてきておりますが、企業への派遣はまだ僅かです。福井県は従業員数が19人までの小規模な事業所が非常に多く、親方が教えるパターンが多いように思います。

インテリア事業協同組合のように、若手職人への教育に熱心な組合等で「ものづくりマスター制度」を

活用していただき、結果として良かったと言ってもらえました。企業に直接に利用してもらうのはまだまだですが、本事例を他の組合へ話す事により、利用希望が少しずつ増えています。組合や団体からも「ものづくりマスター制度」の活用を企業に伝えていただけると良いと思います。